關西大學々報

大正十一年六月十五日創刊
昭和十七年十一月十日印刷
昭和十七年十一月十五日發行

編輯兼發行人　酒井敬民
大阪市北區堂島上三丁目十五番地
印刷所　西大（72）谷口印刷所
大阪市東淀川區長柄中通二丁目十二番地
發行所　關西大學學報部
會員登錄番號二〇六〇〇四

御沙汰

學制頒布七十年ニ際シ昭和十七年十月三十日
文部大臣ニ下賜アラセラル

皇祖考學制ヲ頒布シ給ヒシヨリ茲ニ七十年學藝大ニ興リ教化洽ク行ハレ以テ今日ノ昌運ヲ開ケリ朕深ク之ヲ懌フ

我國今ヤ曠古ノ難局ニ際會セリ時艱ヲ救濟シ皇基ヲ振起スルハ教學ニ須ツ所多シ其任ニ當ル者宜シク銳意勵精國民精神ノ發揚ト學術技藝ノ振興トニ力ヲ致シ撥亂反正進ンテ世界ノ文化ニ寄與セムコトヲ期スヘシ

學制頒布七十年に當りて

學長
法學博士　神戸正雄

明治五年八月三日太政官より學制が頒布せられて茲に七十周年となる。本學に於ても本年の十月三十日、教育勅語奉戴記念日を卜して、併せて學制頒布七十周年記念式を行ふことにした。此日、此に關聯して御沙汰書をも賜はり、戰時下の教學の大本を昭示せられたのは學徒、教育者一同の感激措く能はざる所である。

今日の聖戰下に於て、支那事變初まつてより茲に五年あまりにもなり、而かも能く我國民が此難局に堪へるの精神力と經濟力とを保持し續けつゝあり、更に支那事變は一轉して、昨年十二月八日以來、大東亞戰爭に發展し、米英といふ強大なる敵を向ふに廻はして、着着大戰果を現はし、北はアリューシヤンより、南はソロモン群島に至る西太平洋を制壓し、フイリツピン、マレー、ビルマ、スマトラ、ジヤワ、ボルネオ、ニューギニア等を統治するまでになつたのは、御稜威の賜とはいへ、教育の力にも負ふことが決して少しとはしないであらう。

其強力なる軍の裝備は近代兵器

第二百四號要目

學制頒布七十年に當りて……神戸正雄（一）
學制頒布記念式典に際して……正井敬次（三）
西藏雲南を越ゆるルートの問題……中村良之助（四）
危機の國際法とその將來……川上敬逸（六）
學内報……（八）
校友欄……（二）

を造る工業の技術及組織に待つのであつて、此は又全く近代科學の發達に依るのであり、其は我國の教育の發達が能く此を成し遂げることになつたのである。學制が發布されてから七十年といふが、此間に教育は日に進み月に進みつゝ此處まで來たのである。最初の學制は佛國の制度を中心として、諸外國の制度に倣ふたものであり、國粹主義の人々からは痛く罵られたものであるが、外國制度の模倣導入は精神上の方面については不都合なる事いふ迄もないけれども科學技術の方面については確かに大成功であり、此時以來遠慮なく外國の優れたるものを取入れたればこそ、遂に其方面にては今日既に歐米の水準に達し、自らの創意をも加へて彼よりも一歩進みたるものもあり、其をば自らの設備により製作し得るまでに至つたのである。歐米人の報告の中には間間日本の此方面の發達を知らずして、今尚ほ舊態依然たるが如くに認識しつゝあるのは、むしろ笑ふべきである。しかし精神方面にあつても當時齊しく歐化主義が横行し、明治五年の學制當時には、教育の目的は人々の立身の爲めなりとされたものである。其處には歐米の個人主義、自由主義の香り高いものである。かくして久しく、此方面にては歐化主義と國粹主義との對立抗爭があつたのである。かくして明治二十三年十月三十日の教育勅語を戴くことになり、茲に日本本來の道義精神が明かにせられ、一旦、過りたる方向に向つた舟も正しきに向き返へされた譯であつたが、其れでも教育界、學問界、將た思想界に於ける人々の意見には世界の風浪に動かされるものが多く、知らず識らずに我國固有の精神を見失ふて、唯だ只だ歐米流の後塵を拜して喜びつゝあつたものである。かくして大正の中程以來殊に著しく自由主義が横行し、勞資の抗爭も烈しかつたのである。

此極、我國は何うなるかとも思はしめたのであつたが、幸にして昭和の初め頃より漸く反省の兆を現はし、特に滿洲事變が初まり、我國が國際聯盟を脱退した頃より何人も我國の國際上の地位に目覺めざるを得ぬことゝなり、更に支那事變、更らに大東亞戰爭の勃發するに至つて、茲に日本の精神的獨立は全く確立し、今は全く其本來の貌を保つやうになつた。かくて我國には世界的の科學と、萬國に比類なき國體の下に養はれたる日本精神との並存するあり、我國の今後の雄飛は期して待つべきである。

明治五年の學制には國中一人の無學者なからしめんことを期したものであつたが、此事は多年の努力の結果、其期待に違はず、既に大正の中頃には九九％の就學兒童を見ることになり、昭和の今日には九九・六％といふ、殆んど一〇〇・％ともいふべき就學兒童を見るに至つた。歐米の諸大國にして不就學兒童を多く有つものの少からぬ間にあつて、我國の教育が其普及に於て、彼等の水準以上なることは洵に感激に堪へざる所である。我國の教育は即ち量に於て質に於て世界に冠たりといふも過言ではない。七十年前學制頒布の其時までに存したる我國の教育が寺子屋に於ける幼稚粗笨なものに止まつたのを想へば、感慨無量である。ただし我等教育の任にあるものは此現狀に甘んじてはならぬ。尚足らざる所は決して少しとしないのである。其は斷へず補足しなければならぬし、外國のものとても凡べてを排斥してはならぬ。其の良きもの優れたものは、遠慮なく採用しなくてはならぬ。我等は一刻も油斷してはならぬ。一日として努力を怠つてはならぬ。我等の爲すべき仕事は限なく多い。我等は唯其の努力の足らざることを是れ憂ふるものであり、そして唯其の才能の之に副はざることを是れ恥づるのみである。

學制頒布記念式典に際して

專門部長
經濟學博士
正井敬次

本年は、明治五年に學制が頒布せられてより七十週年に相當する。而してまた本年は明治二十三年に教育勅語の御下賜があつてより五十二年目に當る。是を以て、本年十月三十日の教育勅語御下賜の日に於て、學制頒布七十週年の記念式典が各學校に於て行はれたのである。

蓋し學制頒布によつて我國教育の根本制度が定められたのであるが、併し其後教育界に於ても一般社會に於ても、制度と形式の整備のための外國文化の輸入に忙しく、動もすれば我國本來の精神が忘れられがちであつた。是に於ても、明治二十三年に教育勅語を下し給ひ、以て萬古不易の惟神の大道を臣民に訓し給ふと共に教育の淵源の存する處を明示し給ふたのであり、かくして教育勅語によつて我國の教育に不動の精神が與へられたのである。眞に教育勅語によつて、わが國民は置き忘れたる本然の精神を取り戻したのであり、この勅語によつて、何時の時代に於てもわが國民は、肇國の遠き過去と我國の道義たる八紘一宇の當來の理想との間の時間的の繫りとしての、現實の日本國と日本國民とを感ずるのである。明治五年の學制頒布と明治二十三年の教育勅語御下賜との間には右の如き關係がある。

明治五年より明治二十三年、この時期は近代國家としてのわが日本國の生誕と成育の時代であつた。明治五年に初めて物質文明の運搬者たる鐵道が東京と横濱との間に開通した。國立銀行制度が創設せられた。而して各種學校の制度を定める學制が頒布せられた。これだけで明治五年が我國にとつて如何なる年であつたかが分るであらう。當時世界の思想なり學問上の傾向はどうであつたかと云ふに、明治五年は西暦一八七二年であるが、それはダーウィンの種の起源が發表せられてより十數年後の時期であり、實証主義と功利主義の哲學の基礎の上に自然科學的若くは生物學的の研究方法が、各種の學問殊に精神科學社會科學の方面に用ひられると云ふ時代であつた。例へば經濟學に於ては、功利主義と快樂主義との結實がゼボンスとメンガアーの效用經濟學の理論となつて現はれたのが明治四年の一八七一年であるが、其理論が其後の七十年間の今日に至る個人主義と自由主義の經濟學の基礎となつたのである。科學的なる經濟理論上の右二つの研究方法の傾向は必ずしもアダム・スミスからではなく、實は七十年前の效用經濟學の理論に其の根據を据へて居るのである。經濟學は一例であるが、其他の學問に於ても一般の理想に於ても、明治五年の頃は世界的に同樣の傾向が顯著なる時代であつた。

明治五年以後、我國は右の如き思想と學問の傾向を外國より取入れて之を同化することに忙しかつた。當時文明開化と云ふ言葉が生れたのであるが、其は西洋の唯物的の思想と學問と生活樣式を取入れることに他ならぬのであつた。文明開化の前には國の歷史が顧みられなかつた、敬神崇祖の禮が忘れられた、而して總ての倫理が疑はれ出した。それが教育を受けたる有識者に於て甚しかつた。明治二十年の頃に至つて其の弊が最も甚しかつたものと思はれる。是に於てか教育勅語の御下賜があつて我國民に本然の精神への反省を訓し給る聖旨が示されたのである。

以上に於て私は想を七十年の昔に馳せて學制頒布の時に遡り、而して其後教育勅語御下賜の際に至るまでの時期に於ける我國の事情について一言した。いま今日に於て七十年來の整備せる學制の下に育成せられつゝある學徒に於ては以上述ぶる所に鑑み果して何を感じ何を覺悟すべきであらうか。

言ふまでもなく、其は教育勅語の聖旨を奉體して自己の內に歷史的なる日本國民を深く强く感得し、而して負荷の大任を完うするの覺悟を堅持すること、是れである。

西藏雲南を越ゆるルートの問題

教授　中村良之助

本文は十月二十六日（月）天六學舍集會室に於ける校友會主催講演會の要旨である。

地勢圖と感覺

アジア洲の大地勢圖を展開するに、其中央に一際色も濃くパミール高原とヒマラヤ、崑崙の二大山系が、前者は西南に、後者は東方に走つてゐよう。此兩大山系に抱かれて西藏の高原が暗褐色に、見るからに其地味の不毛を告げ、四周の山麓や平原の社會をして近づかしめないかの感覺を與へてゐる。若し人々が「謎の國、ラマの祕境西藏」等と云ふ文學的修辭に心を奪はれて、それが千古不拔の天險と觀じ終るならば、既に近代の西歐の小市民的心理に陷溺したと云へよう。

僅か一世紀前にあつては、西歐人と雖も憧憬の寶庫印度を確保する爲には此背後の大山塊に自ら何らかの手段を加へ入るべき運命を痛感したのである。英國も後には大をなしたが、當時としてはベンガル灣以東の海上は和蘭西葡の植民地盤であつて、ラッフルスの昭南港經營の提言すら拒否する位で印度の爲めには西藏經營を辭せない意氣をもつた。英國は之等の植民先進國をして古い印度との傳統を絶たしめ新しく其獨占的利益を擁護する上からは、印度は常に背後の祕境に脅かさるゝかの如く宣傳する事は又格別のものであつたであらう。其處にアジアの地勢圖による祕境の宣傳は役立ち、雄渾なるアジアの地勢の冒瀆が初まつたのである。

印度と支那とを遮ぎるもの

「山脈が人類の交通を妨げる」との公理は三歳の童子にもわかる。しかも人人はヒマラヤ山脈が交通の障害たるを否定し得ぬと云ふ心理については其處に何を求めてゐるのであらうか、人々は地理に對して單純なる存在の說明、こゝで云ふならばヒマラヤ山脈に對する自然科學的考察と其態度、即ち山地の高峻や傾斜或ひは人類の居住や活動についての人類學的、生理學的解明と措置に一つ不滿が感ぜられると共に、新たなる命題を模索しつゝあるのではないか。即ち山地での人の生活や行動又は兩麓からの通過の難易は既に物理的生理的自明であり、その程度や實證には他の科學があづかるであらう。地理や地理學は、茲では夫れ等自然科學的結果と、自然科學的態度をはなれて、むしろ人間學的に主體的に「にも拘らず」斯くの如しとの非自然科學的にある時に、立場を得るのではないか。然らば英國がとつた印度植民政策中の「ヒマラヤの未開の高原の地理的說明や祕境的宣傳一政策の正體を暴露して、チベット高原のアジア的地政を開明する事は、地理や地理學が國際問題に對する一種副次的使命とはなるであらう。地表の具體世界を地理科學の持つ一面たる觀念の世界に極限し、其錯綜によつて一切の具體的世界を唯外交と法制の抽象的心理と、歷史を無視して形骸に等しき約條文に把握せしめんとする此地理の無視から西藏ルートの話ははじめられねばならないであらう。

さて上述の如く英國は對西藏政策を痛感しつゝも現實には印度支那半島を迂回し、馬來半島から北上して香港上海而して揚子江に其權益を擴大せる彼の植民政策には公理たるヒマラヤ山脈やチベット高原の踏破の難を避けるにあつた事而して安易にして且つ利潤の多かるべき南東亞の通商交通政策を主としたのであつて、何等讃奬に値せぬ方策であつたと云ふ事を先づ前提し得ると共にそれが結論となるのである。カルカッタ—チベット—西康—四川—揚子江の陸上路開設の費用は優にボンベイ—馬來—香港—上海—漢口航路上に數百隻の船を泛べ得るであらう。

歷史が偶然を機會に展開せぬとすれば、英國が此海路迂廻を選びたる原因も偶然ではないであらう。一艘の船舶の海上交通能率が、陸上交通より安易有効だとの資本主義交通學の定說は、此處では百%の證明である。英國二千噸の船舶の幾分かはチベット政策に代るものであらう。

ヒマラヤ山脈や西藏や其四周の山地が祕境と眺められるについては、觀者が自らの心裡に祕める觀點即ち前記の如き近代的植民政治的意識や營利企業的意識に由來する處が多いのである。而して更に海邊より進攻する英佛の之等の諸勢力にとつては同じく一つの西藏高原が、他方には雲貴の高原として見られて各々當面の接境的問題たる所から恰も群盲象を評するかの愚昧を繰返され勝ちとなるのであつて、此の資料と觀點との相違が何程か地帶の眞相を誤らしめたこともある。此處で地理學的態度として最初に要求されることは、西藏や雲南や西康と云ふ政治區劃に拘束されずに、共通に地域を貫通する一つの性理を見ることから出發することである。

上述の如く山塊が互に四周の國々と人々の交通を妨げてゐるとすれば、夫れは獨り印度側や印度支那半島側でも

なくて、同じく中國側にもそうなのである。單に支那がアジア的主體としての絶體的に英佛と異なると云ふ事の見込を誤つてはならぬ。茲で摘記したいことは、既に日支協力や、日佛印協力の赴く處それは到底英國が印度を基底に孤立反對し得ぬ事である。理由は省略するが、東亞の人々は此原理的地理を見透しの下に科學せねばならぬと云ふ事である。

保　境

由來支那大陸に政權を樹立する者にとつては常に此西方又は西南方は、一つのアクロポリス的存在であた。唯パルテノンの壯殿を築いたアテネの夫れ斯かる小市民的心理を以て此處アジアの中央高地を眺める事は許されないのであつた。それが其記述をして千古未開のタブー的存在の如くにあらしめたのである。歴史的事實は徐々にではあるが、支那は此秘境に數次の交渉を開き、それ故に各世代の王朝は其地理に依つて自已の運命を中原に確保し得たのである。北方には、萬里の長城が恰も其の排他的徴標たるかの如く造出されたにも拘はらず、此西南方にそれの無くして「梁州南徼の地」として、一見棄てられたるかの感あらしめる所に吾人は「保境」の眞意即ち漢族の民族的生活空間の意義を發見せねばならないのである。換言すれば當時の清國の西南邊疆對策の關心こそは、印度を植民地化する英國の脅威であつた譯である。換言すれば、英國の印度に於ける支配權の抽象化の原因に西藏と其附近が高原でありその交通が妨げられるに役立つからであつた。

西藏の威力、西藏雲南を經るルート（略）

西藏人の西藏

西藏は成程ラマの國である。五百の羅漢が修行するといふカイラーサ山の傳說、五ツの雪藏があり、チョモロンと稱される盲目の高山鳥の住する山（カンチュンシャンガは歐名）の語り草等を納得する所から、人界の生活は安定を得てゐるのである。西藏人、彼等は自國を觀音の淨土と信じてゐる。即ち釋尊は在世の當時、觀音菩薩に向つて救ふべき衆生は雪山の彼方にある。故に速かに行つて之を濟度せよと豫言せられたとの理解は今も信じてゐるのである。問題は此理解を如何に近代化するかにあらう。近代交通機關のレールの技術は山岳重疊の地を對象としたものでなかつたかの如く、其樣なものを必要とせない生活の此西藏では返つて此山岳重疊を「蓮華の臺」と見て「其保境」と人心の安定を喜んでゐるのである。ラッサは正に其中心に當り、四方一切の土地の開拓改變は嫌忌される處である。西藏人は自國が鑛物資源に豐富なのは觀音の淨土であるから當然であると考へてゐるのであると多田等觀師は其著「チベット」に記してゐられるが、これは果して、近代西歐文化と鑛物との必須關係を知らずしての皮肉かは仲々に興味のある所である。西藏民族の發祥に語られてゐるが如く、印西の關係は英國到來の以前に決定してゐる。「印度の確保の爲めに西藏を」と云ふ事は其植民的野心に依るのであるし、英國の立場の如く其一方的片務的に西藏の所在が決せぬ處が今日に東亞の地理の正味として其帝國主義から殘存の運命を與へられてゐるのである。即イギリスのゼオクラフイは此處では其普遍性は適用されないであつた。

ルートの問題

チベット通を誇るチャールス・ベルは地球上の廣漠とした地方、例へば沙漠や半沙漠風の未開な土地は宗教の故人鄕であるとして、ラマと西藏との地關係を眺めてゐるし、乾燥して寒くすみ切つた空氣は其知性に刺戟を與へるが雜踏した都市や他國民から切離されてゐる爲め西藏人は頭腦を養ふ題材が無い」と評してゐる。是等からは西藏に對する未開や不毛と云ふ事は皮相的な形容にすぎ無いとの觀測が可能である。如何にも我々東亞は、此西藏とも共榮すべき運命にある事は自明とすれば、自ら、これとの交通ルートが、蓼の英印とは立場を革めて考ふべき問題ではあらう。

西藏雲康のルート

昨今重慶政權に關する印度とのルートが論議されてゐる。具體的な幾多の箇條が說明されねばならないが、其紙面も無いから重要點を指摘するに止めよう。既述した所の西藏と西藏人の生活態度からは、此地帶に一つのルートを開く事は容易である。重慶政權が奥地逃竄の支那人を苦力化する事はむしろ當然の想像であり、戰時といふ事態がそれを必然とする事も明瞭である。

（イ）西康アッサム・ルート＝重慶□成都□巴安□サシャ（印）

（ロ）ダージリン公路＝前路の內巴安から分岐し、拉薩を經てダージリンに出るの中印二路

に就いて、大阪朝日新は月量三、四百噸程度の輸送力を報じてゐる。ルート開通の問題及其能力は此の如く明白となりつつあり、又今後愈々軍事的に重要性を監視し措置されねばならないが既に戰爭が軍事のみに極限されなくて總力戰化する事を思ふ時に、ルートに對する觀察等も大いに變更されねばならないであらう。即ち軍や軍需品の移動に於いては自ら一つのマキシマムが存するし、それの對策即ち遮斷の爲の爆擊は容易に處置されるのであるが、事態が夫れを契機にして、或は夫れに附隨して地帶が重慶政權化し、或ひは英米化する事に就いては餘程重大にして愼重なる決意が要請されるに至るの

である。

茲に於いて「交通機關が新しく交通需要を決する」と云ふ資本主義交通論の原理は警戒されるべきであると共に「市通需要が交通機關の支持顯現を決する」といふ原理も忘れてはならぬ。前者は現狀の軍事的ルートが相對的に西藏西康の支配軟化する事でこれは軍事的に破壞し得る。後者は西藏、西康の交通古來からの需要即ち宗教的土生的社會接觸が古來からの歷史的必然と自然性を繼續せしめる事に關連する。四川はじめ西康、雲南は何れも支那大陸の邊疆をなし、其保境が支那民族の「安居樂業」の東洋政治に特殊であつた事を銘記すべきである。

危機の國際法とその將來

教授　川上敬逸

本稿は十月二十六日校友會主催の講演會における講演の概要である

最近二十年に亘る國際法思想の變遷は、戰爭と中立への挑戰の歷史であつた。戰爭を犯罪視し中立を否定視したヴェルサイユ體制による法治世界主義の風靡した二十年であつた。そして、世界の統制が秩序思想の立場から、戰爭を犯罪視し中立を無用視することによつて試みられたことは、沒却されてならないその功績であつた。しかし、それは一つのはかない觀念的な秩序であつた。流轉の世界をいつまでも、戰勝國に有利な一九二〇年の現狀に釘付けしておいてこれに一指だに染めんとする國家には侵略國として、强力的に制裁を加へんとする行き方であつた。聯盟はそのために亡び、ヴェルサイユ體制はそれがために崩壞に委せられて行つた。すなはち、革命的な秩序改訂の手段としての戰爭が、次から次へと繼起し、擴大する一方となつた。

歷史は理想と現實の相剋を通して作られる意味の世界である。規範からなる法治世界は、いつでも因果からなる宿命の世界の制約の上に立つてゐる。ヴェルサイユ體制は、それを忘れ、そしてこれがために、はかない觀念の秩序に墮してしまつたのである。

思へば、戰爭を犯罪とし、その撲滅のために中立を無用としたことは、たしかに一つの正戰思想の再現でもあつた。なぜなら、それは「侵略」の語を以て過去の正戰思想における「不正戰爭」の觀念に置き代へやうとしたからである。

しかし、戰爭法は古くから、戰爭の開始に關する方面と戰爭の遂行に關する方面とに分れてゐた。どんな戰爭が正しいか？　どんな原因によつて、どうして、いつ、どこで戰はれた戰爭が正しいのか？　こうした考は特に十九世紀の後半にはも早や旺なりし十六・七世紀の片影さへ止めぬまでに衰へてしまつてゐた。そして、戰爭に關する法は、僅に戰爭の遂行に關する、いはば敵對行動に關する方面だけに傾けられてしまつた。ところが、さきの世界大戰の結果は、必ず一つの反動を呼び起さずにはおかなかつた。かくて、正戰學說は再び日の目を仰いだかのやうではあつたが、しかし、それによつて再現せられたのは一ケの似非正戰思想にほかならなかつた。なぜなら、近世國際法の創設者たちは、正當な戰爭と不正な戰爭との區別を、ヴェルサイユ體制のやうに、決してその原因から切り離してはゐなかつたからである。戰爭の因つて生ずる原因には手を觸れずに、むしろこれを擁護さへして、その結果たる戰爭だけを犯罪視しこれに嚴罰を加へんとしたことは、その組織の脆弱な國際社會の現狀を見ざる暴險であつた。それにもかゝはらず聯盟は戰爭の防止と制裁に急なる一方であつたゝめ、すでに起つてしまつた戰爭を適正に規律する方面には、多くを寄與しなかつた。そのため、今日なほ交戰法規の多くは一八九九年と一九〇七年の海牙條約のまゝに近い現狀にある。めまぐるしい世界の變遷と著しい戰爭技術の進步とが、戰爭法の無能を暴露したかに思はれたのも、決して故なしとせぬのである。

そこで、考へられねばならぬことは、現行國際法が決して一日にして成つたものではないといふ自明の眞理についてゞある。それは、久しきに亘る人類の國際生活の必要と經驗とに促されて傳統化され慣習法化されて成つたものなのである。されば、究明せられることの喫緊なのは、かゝる近世國際法の有するいはゞ、秩序關係な意味にあつても、そのこれを微溫的なりとして觀念的な改變を試みんとするが如き短見を敢てすることにあつてはならないのではないか。

あれを想ひ、これを念ずるなら、或は四百年を貫く近世國際法の變遷に鑑み、或は廣範にして複雜な國際法の諸々の規範の海に視野を投じて、世界の進步ある平和秩序の建設に關して有する現行國際法の解釋論と立法論とが、活潑に、しかし峻別して行はれねばならないであらう。

私は法が秩序に對して有つてゐる第一義的な安定の機能と第二義的な變化の機能の見地から、危機の國際法思想の嚮ふべき指標を明かにするやうにつとめたい。それによつて、一面平時法においては平和的秩序改訂のための動的原理を確立し、他面戰時法においては、戰爭と中立の現狀の是正に資したく思ふ。そして、この意味において、また大東亞戰爭についても、その合秩序原理的ならんことに菲才を傾けたいと思ふ。

紹介

教授　矢口孝次郎

吾國に於ける近時の西洋經濟史研究には注目すべき若干の傾向が見出される。その一つは、從來西洋經濟史上の諸問題の解釋に關して啓蒙的役割を果して來た所謂教科書的解釋乃至古典的解釋に對して、批判的研究に基き或は新なる資料に基いて、それを超えて新なる解釋を構成せんとする努力の見られることである。尤もこの場合に於いても、それらの新なる研究は、歐洲に於ける研究の結果をとり入れたものであり、それに呼應するものであることは言ふまでもない。然し何れにせよ、十年前の經濟史教科書を新に書き直す必要を吾々に感ぜしむるに至つたことは事實であつて、それらの努力に對して吾々は深き敬意を表さねばならない。これに對し他の一つの傾向は、以上の傾向に應じて、原典及びオルソドックスの研究が却つて旺盛となつて來たことであつて、その結果は各種の原典及び古典の譯出となつて現はれた。

いまこゝにこれらの傾向を示す勞作の中、特にイギリス經濟史に關して學生諸君に紹介したいと思ふ三書を選んだ。

◇

第一は上述の後者の傾向に關するものであるが、トーマス・マンの論述の邦譯が二種出現したことである。それは即ち張漢裕氏譯「外國貿易によるイギリスの財寶」堀江英一氏、河野健二氏譯「重商主義論」である。周知の如く、重商主義者としてのマンには三つの有名なる論述、即ち「イギリスの東印度貿易論」「東印度會社の請願と進言」「外國貿易によるイギリスの財寶」があるが、これらの論述、就中最後の「イギリスの財寶」は彼をして重商主義の代辯者の地位に置いたものであり、またこの論述は重商主義の古典でもある。上掲の譯書の中、張氏の譯書はこの代表的論述の譯出であり、堀江、河野兩氏の譯書はマンの上述の三つの論述の全譯である。この二つの譯書は、何れも讀みにくき近世初期の英文を、極めてわかり易く譯出したものであり、原典なくしてもマンの說くところを明瞭に理解せしむるものである。從來一般讀者には近付き難かつたかゝる古典を、吾々の身近に與へてくれた三氏の努力に對し、學界は敬意を表すべきである。然もこの二つの譯書には更に他の特質が存する。それは近時外國書の譯出に際して行はれる良き慣はしである譯者の解說が付せられてゐることであつて、本譯書の如き、現代を去ること遠き文獻には殊にそのことが必要である。のみならず兩譯書には更に他の一致が見出される。それは兩者ともに譯者の恩師の校閲を經てゐることである。即ち前者に於ける矢內原忠雄氏、後者に於ける谷口吉彥博士の校閲がそれであつて、そのことはまことに譯者の幸福であるとともに、譯書を手にする吾々にとつての幸福であると言はねばならない。

◇

次に先に述べた第一の傾向を示すものとして「教養文庫」の一册である。

小松芳喬氏著「中世英國農村」を擧げたい。この書は小册ではあるが、中世英國農村即ちマナに就いて、從來の古典的解釋を超えて、新なる研究の結果を廣く紹介せんとするものである。周知の如く、マナの解釋乃至理論は、シーボーム、ヴイノグラードフ、メイトランド等によつて殆んど閒然するところなきまでに構成され、それが古典的理論として存在して居たのであるが、近時のコスミンスキー或はポスタン等の研究の結果はかゝる古典的理論に少なからざる訂正を要求するに至つた。これら古典的理論及び新なる研究が如何なるものであるか、またその閒の關係を如何に見るべきか、これらの問題に對し一般讀者にも理解し易い叙述を以て解答を與へてゐる。

然し本書は更に他の特徵を有つてゐることを擧げねばならない。それは中世農村を、農民の生活乃至存在に即して理解して行く態度であつて、この點に於いても從來の教科書的說明に反省を求むるものである。即ち從來の中世農村の說明は農村の社會的經濟的構造の解釋、農民の身分の概念的解釋等に終始してゐたのであつて、農民の日常生活とは游離したものであつた。然るに本書に於いては、農民の衣食住各般の生活が、興味ある叙述を以て、農村の機構と結び付けられて、解釋されてゐる。從來吾々は德川時代の農民の生活に就いては、その日常を身近かに感じつゝ理解することを得たが、歐洲のそれに就いては、一通りの解釋を與へられつゝも、絲遠いものを感じてゐた。いま本書によつてその欠陷が補はれたと言ふことが出來る。これらのことは學生諸君が講義に於いて聞くことを得ない——また講義をしつゝある吾々の側からはそれを說くことを時閒的に許されない——ことがらであつた。この意味に於いても本書の一讀をすゝめたいと思ふ。

然し本書は單なる入門書ではない。むしろ專門の研究者に多くの指針を與へるものであり、また本書によつて却つて、古典的理論への更に深き理解を促されるのである。この意味に於いても本書の學界への貢獻に敬意を表さねばならないのである。

日本出版文化協會　推薦圖書（第十二回拔萃）

○資源經濟地理原料部門　石田龍次郎著
B6　二三頁　一・九〇　中興館

○ナチス民法學の精神　吾妻光俊著
A5　三九頁　三・二〇　岩波書店

○東南亞細亞における外國投資　H・G・キャリス著　日本國際協會太平洋問題調査部譯
A5　三四頁　二・五〇　同盟通信社

○室町時代美術史論　谷信一著
A5　五九六頁　六・〇〇　東京堂

學内報

學制頒布七十周年式典

明治五年學制頒布あらせられてより七十年　畏くも優渥なる御沙汰を拜したる十月廿日宛る教育勅語渙發五十二周年の意義深き日、本學にては記念式典を學部豫科は午前十時豫科講堂に於て、專門部一部は正午天六學舍講堂に於て擧行、宮城遙拜、君が代奉唱、次いで教育勅語捧讀の後、學部豫科は學長、專門部は專門部長の訓話があつて閉式した。

明治節拜賀式

大東亞戰爭下初の明治節式典は學部及豫科は十一月三日午前十時より、專門部は午前九時半より擧行奉祝の意を表し奉つた。

昭和十八年度　學部學科目擔任

○法文學部法律學科

英法、海商法、私法律學演習、手形法、小切手法　安藤　光
社會學、社會政策、政治學　岩崎　卯一
佛法、親族法、相續法、私法律學演習　木村　健助
哲學、西洋倫理學　武内　省三
行政法總論、行政法各論、法理學、法律思想史　中谷　敬壽
獨法、商法總則、商行爲、法律學演習、經濟法　野村　次夫
經濟政策概論　磯部　喜一
經濟原論　正井　敬次
法律學演習　吉田　一枝
法律學演習　植田　重正
獨法　福島　四郎
財政學　三谷　道麿
佛法、國際私法　柳瀨　兼助
英法、物權法、法律學演習　和田　豐二
債權各論　石田文次郎
東洋倫理學　石濱純太郎
日本文化史　魚澄惣五郎
民事訴訟法、破産法　齋藤常三郎
憲法、統制法、行政學　佐々木惣一
刑事訴訟法　佐伯　千仞
國際公法　末廣　重雄
民法總則　末川　博
會社法　竹田　省
東亞經濟論　谷口　吉彦
債權總論　中島　玉吉
信託法　本莊鐵次郎
日本法制史　牧　健二
刑法總則、刑法各論　宮本　英脩
民事訴訟法　山田　正三
東洋文化史　矢野　仁一
獨法、公法演習　山木戸克巳

○同　政治學科

社會學、社會政策、政治學政治學演習、政治學特殊問題　岩崎　卯一
哲學、西洋倫理學　武内　省三
行政法總論、行政法各論、法理學　中谷　敬壽
工業政策、經濟政策概論　磯部　喜一
經濟原論　正井　敬次
政治書講讀　川上　敬逸
財政學　三谷　道麿
國際私法　柳瀨　兼助
政治史　池田　榮
東洋倫理學　石濱純太郎
日本文化史　魚澄惣五郎
政治學、政治學特殊問題　黑田　覺
日本經濟史　黑正　巖
憲法、統制法、行政學　佐々木惣一
國際公法、外交史　末廣　重雄
民法總則　末川　博
會社法　竹田　省
東亞經濟論　谷口　吉彦
政治學史　恒藤　恭
債權總論　中島　玉吉
統計學　蛯川　虎三
政治書研究　藤本　進治
日本法制史　牧　健二
刑法總則、刑法各論　宮本　英脩
東洋文化史、東亞政治論　矢野　仁一

○同　文學科哲學專攻科

社會學、社會政策、政治學　岩崎　卯一
哲學、倫理學、西洋倫理學、哲學演習　武内　省三
法理學　中谷　敬壽
文學概論　堀　正人
經濟原論　正井　敬次
認識論、哲學演習　大小島眞二
哲學書講讀、論理認識論特殊問題、論理學、哲學特殊問題　菅　守常
教授法　三枝樹正道
東洋倫理學、支那文學　石濱純太郎
日本文化史　魚澄惣五郎
美學　上野　照夫
宗教學、宗教學特殊問題　片山　正直
國文學　金子又兵衛
ラテン語　後藤　敏雄
憲法　佐々木惣一
西洋哲學史（近代、現代）　下程　勇吉
東洋哲學史（支那）、日本精神史、日本支那哲學思想史特殊問題　新町　德之
美術史　田邊信太郎
佛教學、東洋哲學史（印度）　高島　寛我
政治學史　恒藤　恭
心理學、心理學特殊問題　内藤耕次郎
社會學特殊問題　嫜岡　勤
獨語、倫理學演習　藤本　進治
西洋哲學史（古代、中世）哲學史特殊問題　宮崎　幸三
西洋文化史　村田數之亮
東洋文化史　矢野　仁一

○同　英文學專攻科

哲學、西洋倫理學　武内　省三
文學概論、英文學　堀　正人
英文學　村上　喜貞
佛語　賀來　俊一
獨語　上道　直夫
獨語　大小島眞二
教授法　三枝樹正道
英文學　山田松太郎
支那文學、東洋倫理學　石濱純太郎
日本文化史　魚澄惣五郎
美學　上野　照夫
英語學　大平　賴母
言語學　小田　良弼
國文學　金子又兵衛
ラテン語　後藤　敏雄
美術史　田邊信太郎
英語學　細江　逸記
佛語　三木　治
西洋文化史　村田數之亮
東洋文化史　矢野　仁一

○經商學部經濟學科

財政學　神戸　正雄
經濟政策概論、工業政策、獨文經濟書講讀、經濟學演習、國土計畫論　磯部　喜一
佛文經濟書講讀　賀來　俊一
會計學、簿記原理、佛文經濟書講讀、經營學　加藤金次郎
交通論、經濟演習　河村　宜介
商業政策　瀧澤喜子雄
經濟原論、經濟演習　正井　敬次
銀行及信託論、商業數學　三木　純吉
憲法、行政法總論、行政法各論　吉田　一枝
社會學、社會政策　岩崎　卯一
民法總則　木村　健助
哲學、西洋倫理學　武内　省三
刑法總論、刑法各論　植田　重正
國際公法　川上　敬逸
商法、商法總則、商行爲　國藏　胤臣
資源經濟論、英文經濟書講讀　中川庸太郎
地政學　中村良之助
民法、親族法、相續法、債權法總論、債權法各論　福島　四郎
教育學　三枝樹正道
英文經濟書講讀、經濟演習　三谷　道曆
獨文經濟書講讀　三谷　友吉
貨幣論、金融論、英文經濟書講讀、經濟演習　森川　太郎
經濟史、獨文經濟書講讀　矢口孝次郎
國際私法　柳瀨　兼助
東洋倫理學　石濱純太郎
社會政策　石川　興二
日本文化史　魚澄惣五郎
華文經濟書講讀　奥平　定世
日本經濟史　黒正　巖
華文經濟書講讀　黄　廷　富
物權法　齋藤常三郎
農業政策　四宮　恭二
會計學　陶山誠太郎
手形法、小切手法　田邊信太郎
東亞經濟論　竹田　省
統計學　谷口　吉彦
經營學　蜷川　虎三
工業概論　村本　福松
○同　商業學科　未　定
獨文經濟書講讀、工業政策　磯部　喜一
經濟演習　賀來　俊一
佛文經濟書講讀　加藤金次郎
經營學、會計學、商業演習　河村　宜介
簿記原理、佛文經濟書講讀　瀧澤喜子雄
交通論、經濟演習　水谷　揆一
商業概論、商業簿記、英文經濟書講讀、商業政策　三木　純吉
商業英語、英文經濟書講讀　正井　敬次
銀行及信託論、經營財務論　吉田　一枝
商業演習、商業數學、英文經濟書講讀　岩崎　卯一
經濟原論、經濟演習　木村　健助
憲法、行政法總論、行政法各論　武内　省三
社會學、社會政策　川上　敬逸
民法總則　國藏　胤臣
商業總則、商行爲　佐伯　三郎
配給論　中村良之助
商業地理　福島　四郎
民法、親族法、相續法、債權法總論、債權法各論　三谷　道曆
財政學、經濟演習　三枝樹正道
教育學　三谷　友吉
獨文濟經書講讀　森川　太郎
貨幣論、金融論　矢口孝次郎
獨文經濟書講讀、經濟史　石濱純太郎
東洋倫理學　石川　興二
社會政策　魚澄惣五郎
日本文化史　奥平　定世
華文經濟書講讀　大橋　光雄
手形法、小切手法　木村弘三郎
銀行簿記、工業簿記　黒正　巖
日本經濟史　近藤　文二
保險論　黄　廷　富
華文經濟書講讀　齋藤常三郎
物權法　四宮　恭二
農業政策　陶山誠太郎
會計學　谷口　吉彦
東亞經濟論　蜷川　虎三
統計學　原田鹿太郎
商行爲法　古林　喜樂
經營勞務論　村本　福松
經營學　未　定
工業概論

がくほう抄

▽關西七大學學生主事會議—十月廿三日於同志社開催、本學より瀧澤、八島、安川の三主事出席。

▽岩崎、中村兩教授、姫岡講師日本社會學會出席—十月廿・廿一日の兩日東京に於ける日本社會學會大會に出席、中村教授は廿一日東亞民族に關する特別討論會の席上「東亞の民族と地域との

「關係」と題して意見を發表した。

▽大小島教授哲學部會出席—十一月五、六、七の三日間東京文部省に開催された日本諸學振興會哲學部會に出席。

▽所勇講師—奈良市上高畑町一三三一に轉居。

報國團彙報

學部報國團

▽學生訓育強化要綱—曩に「戰時學徒自戒五條」及び「學生心得」に於て戰時學生の本分を明示せるも、一層之が實踐を期せんが爲め、敬禮、頭髪及服裝其の他日常學生生活に於ける規律の緊要なるものにつき學示して勵行を要望した。

▽體力章檢定—十月廿六、七、八、九の四日間實施。

豫科報國團

▽體力章檢定—十月廿、廿一日の兩日實施。

▽勤勞作業—十一月二日開墾を兼ねて勤勞作業を實施。

▽陸上鍛錬大會—十一月四日（創立記念日）千里山大運動場に於て陸上鍛錬大會を擧行。

▽剛健旅行—十一月七日紀泉アルプス方面に剛健旅行を實施。

▽軍作業—十一月十三日—〇〇方面に軍作業に從ふ。

專門部報國團

▽體力章檢定—十月廿八、九日の兩日及び十一月六日に實施した。

▽新幹事決定—一部二部とも幹事決定任命を了した。新幹事氏名別項。

▽一部修練旅行—十一月十一日（水）京阪大山崎より淀を經て伏見桃山陵に參拜宇治平等院に至る二十二粁の行程を踏破した。

報國團新幹事決定（一七・一〇・一）

專門部第一部報國團

▽總務部—諸田酉（經二）出田勝重（經二）古富清（商二）阿部好男（法一）浦善夫（法一）森井彬（商二）塩見敬一郎（經二）五十嵐修（經一）石本好男（經二）上武文夫（法二）猪熊秀明（商一）三村雅利（商一）三浦一郎（商二）

▽修練部—上武文夫、倉地勤也、横山義弘（以上法二）出田勝重、石本好男、塩見敬一郎、谷口正彰（以上經二）古富清、森井彬、天野一史、中島利夫、友野廣文（以上商二）阿部好男、浦善夫二宮正己（以上法一）五十嵐修、三木博、山岡得志（以上經一）猪熊秀明、小倉正直、三村雅利、宇野謹二（以上商一）

▽國防訓練部—天野一史（商二）宇野謹二（商一）—射擊峯房美（商二）—騎道柄谷司郎（經二）—銃劍道天野一史（商二）—航空河野達成（法二）—自動車園田英一（法二）

▽體練部—倉地勤也（法二）二宮正己（法一）—劍道吉村賢太郎（商二）柔道大畑義信（法二）—弓道高杉健太郎（經二）—相撲猪木八榮（經二）—拳法花戸榮次郎（商二）—陸上吉津賢治（經二）—水泳倉地勤也（法二）—野球森山欣司（法二）—庭球前田利久（經二）—卓球白坂陽一（商二）—籠球梅木剛（商二）—蹴球狩場六郎（經二）—ラグビー細川甲子郎（商二）—杖球原田修（商二）—登山柿木弘（經二）—スキー工藤章三（商二）

▽教養部—山脇修（經二）三木博（經二）—國學研究古川勝次（法二）—東亞研究中尾健三（經二）—法律研究横山義弘（法二）—經濟研究諸田酉（經二）—商業研究寺岡敏通（商二）語學研究山脇修（經二）—藝能宮脇章（商二）雜誌伊藤輝彦（經二）

▽厚生部—總務部付部內部幹事兼任

專門部第二部報國團

▽總務部—田邊周（經二）增尾良（經二）北出久仁夫（法二）名村壽夫（商二）小室學（經二）松川萬男（經二）關益雄（商二）澤田裕之（法二）叶正利（商二）多田申壽（經二）石塚選朗（法二）岸本育成（經二）

昭和十七年度追加 卒業生氏名

◇經商學部

商業學科（一名）

吉岡京輿（大阪）

◇專門部一部

經濟學科（四名）

許斐茂明（福岡）
田中孝三（大阪）
丹治修三（福島）
南部恒至（兵庫）

商業學科（一〇名）

沖汐四郎（兵庫）
折口昌弘（長崎）
菓子尾禎一（福井）
桂井新一（大阪）
北尾利光（鳥取）
小西進兵（庫）
田中正雄（奈良）
濱田榮吉（高知）
堀上茂俊（富山）
宮崎淳（鳥取）
藤原章（三重）
山本敏夫（兵庫）
吉川實（大阪）

◇專門部二部

法律學科（六名）

板垣忠義（大分）
平山敦司（朝鮮）
三浦義正（奈良）
山本七郎（兵庫）
吉田晃（兵庫）
吉峯英夫（鹿兒島）

經濟學科（一四名）

嚴本哲兒（朝鮮）
角上英夫（京都）
梶川武利（福井）
桐谷良一（和歌山）
久納淳一（兵庫）
坂本陽（大阪）
笹岡幸彦（高知）
嶋田英彦（大阪）
田中正春（大阪）
巽精造（大阪）
藤田邦文（大阪）
藤原章（三重）
朝日博（廣島）
朝山泰治（兵庫）
井上正純（宮崎）
石塚俊雄（大阪）
浦川利雄（兵庫）
海老名茂（兵庫）
岡田基（群馬）
柴田貞男（靜岡）
田村寛（神奈川）
永田信明（東京）
永原六郎（滋賀）
西村三男（山口）
濱澤舜（大阪）
福本謙二（大阪）
松原幸雄（岡山）
松村正夫（大阪）
守屋茂（岡山）
吉田一郎（鳥取）
吉田潔（德島）

土田八郎(法一)戸田泰次(商二)

▽修練部—西村攝、北出久仁夫、村上健一、平野孔久、菊池委夫、杉尾撤郎(以上法二)増尾良、近田精吉、伊藤隆夫、篠木吉堯、油谷耕司、野間昌幸(以上經二)北村要雄、伊海文生、宇野弘、中川洗、關益雄、大久保勉男(以上商二)淺井音吉、田中茂(以上國二)神藤清、芳地修(以上英二)西村俊一、士田八郎、川崎保夫、澤田裕之、三井亨夫、山路正、安丸周一(以上法一)岸本育成、年澄清、小室學、小橋友明(以上經一)名村謙夫、村田恒夫、叶正利、澤田恭平、上田重次(以上商一)高野直孝、登地佐太郎(以上國一)渡部昌雄、馬場俊一(以上英一)

▽國防訓練部—三宅勇(商二)—射擊岩本周治(經二)—騎道三宅勇(商二)

▽體練部—大久保勉男(商二)—劍道大久保勉男(商二)—柔道植村良之助(法二)相撲香川直行(商一)—拳法辻井治(經二)—卓球増田豊多郎(商二)—登山鳥本三郎(經二)

▽教養部—村上健一(法二)—國學研究猪服敏信(商二)—東亞研究中村清(經二)—法律研究村上健一(法二)經濟研究岩城俊彌(經二)—商業研究高木清(商二)—國漢研究吉田懸造(國二)—英語研究神藤清(英二)—藝能楠本俊治(商二)—雜誌澤理(商二)

▽厚生部—總務部付及部内部幹事兼任、北村要雄(商二)三好一夫(經二)

校友欄

中村・川上兩教授講演會

校友會主催、十月講演會は十月二十六日(月)午後六時半より天六學舍集會室に於て開催、川上教授は「危機の國際法」と其將來」中村教授は「重慶より西藏雲南を越へて」と題して大要別項の如き講演あり、講堂の聽衆に多大の感銘を與へ、午後八時半盛會裡に終了した。

北海道支部新設

昭和十七年十月十七日十五時札幌市郊定山渓定山園に創立總會並に結成式を擧行、會則の審議、役員の選任ありて、懸案の支部設立は茲に輝しく成立した。

新任役員

支部長　中田克己知
副支部長　松永　三郎
幹事　宮本　勇男　勢渡　逞男
　　岡本　理一　西田・一行
　　濱口卯之助　小山　松男
　　西村　是夫　金丸　義郎

支部事務所—札幌市大通西十二丁目
中田克己知方

岡山支部

十月廿五日(日)午後三時より岡山市後樂園外苑「荒手茶寮」に於て總會を開催した。わが岡山支部は大正初年創立約三十年に垂んとする本學としては最も古き歴史を有する支部なるも、支部長逝去支部役員の轉出等のため一時支部活動は休止の狀態であつたが、茲に愈々再出發することになつた。

當日母校並に本部より專門部主事和田教授、神屋敷學報主任出席され、躍進母校の近況を聽き、在學時代と宵壌の差ある現勢と、戰時下緊張せる學生の意氣に今更乍ら、懷舊の情と時勢の推移を痛感し、今後大いに母校の爲協力することを誓ひ、神崎支部長の母校の萬歳、和田先生の發聲により校友會岡山支部の萬歳を高唱して八時盛會裡に散會した。

尙當日決定の支部役員は左の通り。

支部長　神崎傳次郎
副支部長　井上　守三
幹事　中永　美雄　三村　福一
　　寺尾賢三郎、右遠榮一、宇野利男、塩田方大郎、内田晃一、内田俊治、金谷秀二、武元藤吉、久須美泰介、和氣正之、藤原萬歳

尙支部事務所は、岡山市清心町二七四神崎傳次郎方に置く。

出席會員—井上守三、和氣正之、神崎傳次郎、武元邦男、中永美雄、宇野利男、内田俊治、内田晃一、右遠榮一、久須美泰介、寺尾賢三郎、三村福一、塩田方大郎

福岡支部

秋季例會

十月十七日大宰府神苑に於て開催す。當日夜來の雨カラリと霽れ神苑の紅葉がボツ〳〵色づき、其の景趣得も云はれず、やがて有名なるお石茶屋本邸に集合し、女將おいしの斡旋にて晩餐を共にし、池田支部長の挨拶に始まり交々舊を物語り、母校の發展を祝し、聖戰の完遂を祈念し、母校の萬歳を三唱して散會したるは八時頃なりき。

當日來會の校友左の如し(イロハ順)

池田重吉(辯護士)池田駒太郎(塚本商事)岩井幾三郎(東京火災)錦田良夫(判事)河村正夫(日本發送電)根中治(同)淺沼猪助(公証人)岸田哲夫(西日本鐵道)宮崎久樹(住友銀行)宮本信義(縣石炭販賣會社)

上海支部

十月々例會—今や英米色は全掃され大東亞戰下最重要なる大東亞都市の一として再生す可く活潑な息吹きを續けある上海に、我が陸海軍防空司令部の指導下に本月一日より十日間に亘り實施された全上海演習燈火管制のため、且は亦後記の谷口信男氏の開業三週年自祝宴が十月三日夕興行され支部長初め幹事も此れに招待されたゝめ、管制下暗闇の街路を冒して亞四日再度參集するを避けて十月々例會は三日午後五時三十分より日本倶樂部に於て開宴前に開催した。當日は激務

を推して出席された福富幹事より氏最近を日本朝鮮滿洲北支視察に關する有益な土産話や木月二十六日擧行した抗州觀月行に參加された方々より報告があつた。本年度秋季總會を恒例に依り十一月四日(水)に開催する件を決議した。

出席者　忽那、福富、辻野、細川、谷口、岡部

政交會總會

祈願と錬成と總會

學部政治科卒業生より成る政交會にては、十一月八日(日)大詔奉戴の佳き日、快晴に惠まれて午前九時半關急上六に集合、關急枚岡に下して官幣大社枚岡神社に參拜、わが政交會出征會員並に皇軍將士の武運長久を祈願し、それより錦繡織りなす錬成コースを生駒山に登攀、山上より豐かに穫る攝河泉さては大和の平原を見はるかして携行の中食をしたゝめ、山上を跋渉して平素の煩瑣を忘れ心身脱落、明日の英氣を涵養して生駒中腹の總會場「戎屋」に集まり、或は烏驚を闘はして午後四時すぎ開宴、母校のことどもを中心に語り合ひ、盛會裡に午後八時閉宴した。

當日の出席者―石井庄逸、神屋敷民藏、吉田奎文、安富敬作、山口喜八良、東一夫、宮原一、宮川一男、平田榮福(イロハ順)

五絲會秋季總會

昭和五年大學部卒業生から成る同窓會の五絲會、昭和十七年度秋季總會は同期生横の繋りを益々に堅密にする爲去る十月二十七日(火曜日)大阪土佐堀船町「大新樓」に於て午後六時より開催した。來り會する者阪神間より廿數名に及び既に卒業後足掛け十二年に亙る思出話と其後の互の消息に、或は母校の近況話などに盡きぬ名殘りを惜しんで今後の協力を一層誓つて九時散會したのであつた。(鈴木武夫報)

會員消息

氏名下の數字中、漢字は大正年數、算用數字は昭和年數を16前は三月、16後は十二月卒業を示す、又括弧内にある消息は業務動靜

大法

足立　長雄(5)滿洲國間島省琿春縣琿春街大同區(琿春砂金會社)

荒木　信隆(7)京城府青葉町二ノ一一(朝鮮總督府企畫部)

大崎　一成(14)東京市日本橋區室町一ノ一帝國纖維會社内

岡崎　重光(5)北區都島本通一ノ一〇

川島　通利(12)京城府苑南町二一九(安田銀行京城支店)

岸本　到(一四)咸興府春日町二ノ七三(北鮮合同電氣會社營業課長)

金剛　正雄(16後)東京市澁谷區原宿二丁目東憲寄宿舍

新本　智亮(16後)兵庫縣武庫郡本山村

岡木野間八

竹澤喜代治(9)(大阪地方裁判所判事)

高島　秀光(10)朝鮮全南順天邑梅谷里一八三(光州地方法院順天支廳)

辻内　良隆(7)朝鮮江原道原州邑上洞里官舍(京城地方法院原州支廳)

富田　正俊(16前)(大正海上火災保險會社大阪支店)

中山　政信(6)京城府貞洞町一ノ二八(鐵鋼統制會社京城支店)

長瀨　玄亮(14)(陸軍主計大尉大阪陸軍造兵廠會計監督官)

濱谷伊勢次(13)釜山府富平町四ノ七、

藤田方(釜山鐵道局經理部)

藤山　正己(10)朝鮮全州府大正町三ノ一七(朝鮮貯蓄銀行支店)

牧野　秀夫(10)京城府三坂通三七九(朝鮮電極會社)

宮下　德寶(6)朝鮮平北定州邑城内、新義州法院定州支廳(同廳判事)

宮地　武(16前)朝鮮全南寶城郡寶城邑、金融組合内(寶城金融組合理事)

大政

鈴川　勳(12)京城府典農町五五八ノ一三四(朝鮮中央無盡會社)

山下　勇治(16前)(會根崎警察署)

山田　義臣(12)朝鮮海州府東支里緣ケ丘

李　雄烈(14)大田府春日町二ノ五九(辯理士、計理士)

大文

田所　穣(9英)京城府岡崎町五(京城日報政治部次長)

大經

中尾　秀嗣(12)東京市大森區田園調布二ノ八三一

藤川　建治(8)東區安土町一ノ五

大商

生村　藤藏(三)神戸市神戸區元町通一ノ二一九

今戸　正之(13)京城府新堂三六六ノ六四(朝鮮繭絲統制會社)

小田切　酉(8)鎌倉市雪之下四〇四(麹町區、三菱商事會社機械部)

小幡　俊次(11)東京市澁ケ區幡ケ谷本町二ノ七四八)京王會館内

大川　正雄(五)京城府元町二ノ七

大塚　豐(6)(大阪市主事、電氣局)

岸本　芳房(16前)山口市糸米川路上清水

龍藤　新八(13)(日本自動車配給會社軍納部第二課)

福原　定一(13)北區堂島上二ノ三八(住友金屬工業會社本店營業所鋼管部)

山縣　治雄(13)(庶民金庫大阪支所)

吉川芳三郎(三五)北河内郡守口町守口一〇〇九

渡邊　輝二(16前)(東亞電機會社)

專一法

太田　義三(8)上海麥克利加路二八二

號、中華樟腦會社内(同社)

奥野　弘之(13)京城府元町二ノ七、大川方(朝鮮運送本社秘書係)

金城　昌金(11)朝鮮木浦府南橋洞一六三三

島田　晃(13)京城府漢江通三丁目、

鐵道局第五益濟寮內
富永　久良（8）京城府水標町六七ノ三
（京畿道警察部高等課）
川邊　隆（8）釜山府草場町三ノ二
（釜山臨港鐵道會社）
門谷　壽郎（15）（西區江戸堀上通一ノ一
一、石原產業海運會社經理部）

專一經

足羽　忠明（16前）尼崎市昭和南通四ノ
八四（大阪橋本組）
淺井　秀雄（11）（大連羽月ビル、日用品
配給統制組合）
熊澤　一夫（14）朝鮮咸南高原郡水洞面
仁興里（住友朝鮮鑛業所高原鑛山）
藤木　德洙（15）朝鮮海南郡內面鶴洞里
（海南金融組合）
松島　央（15）名古屋市中區南大津通
二ノ五
横田　絢一（9）郡山府本町一ノ四九

專一商

大寺　文雄（9）東成區東小橋北之町三
ノ六六ノ二
沖田　實（16前）（佐々木營業部）
奥村　寛（16前）神戸市灘區木內通四
ノ三三、奥村專治方
加茂　正弘（9）（朝鮮鐵工所）
木村　富士（9）京城府御成町一一六
（嘉納會社京城支店）
鈴川　範敎（14）京城府蓬萊四ノ二九四
ノ一〇（山岡內燃機械會社京城支店）
善谷　昌健（12）京城府阿峴町豈七ノ六
瀧北　勇夫（12）兵庫縣赤穗郡相生町土
町二ノ三八五五ノ一（播磨造船所）
友金　悟（16前）新京特別市大同街六
〇一號、滿洲電信電話會社內（同社放
送部普及課）
中野　博（16前）福岡市上土居町一九
長藤　鉞男（16後）廣島市彌生町
八田　幾藏（16前）東京市世田ヶ谷區大
原町一〇六六、中野方
橋本　三郎（12）中河內郡龍華町澁川六
六六、中島正氣寮內（中島造機會社）
村上吉三郎（9）朝鮮黃海道新溪軍新溪
面鄕校里四〇
矢吹　之孝（11）東京市神田區和泉町一
ノ九（日本通運東京支社統轄部軍用課）
山川　正七（14）京城府元町二ノ五二、
吉武方
山下　利（15）朝鮮仁川府海岸通一ノ
七、星心寮內（朝鮮運送仁川支店）
山村　明（13）京城府新堂町三〇四、
東棉社宅（南北棉業會社）
山本　實（8）兵庫縣相生市古池宅一
八九

專二法

安藝　茂富（明31）高松市宮脇町八三五
淺田　久雄（14）平壤府東町、東アパー
ト內
東　正美（12）廣島市古田町古江三
新居　寛（三）東京市大森區上池上町
一一一六（大北火災海上運送保險會社
火災業務課長）
在里　三芳（三）京城府南米倉町一九二
（藤本組京城出張所）
伊藤　眞造（5）朝鮮城津府双浦町、高
周波社宅四〇八
池田　長久（15）佐世保市春日町五一、益
水方（西海中學校敎諭）
出射　明（4）東京市杉並區東田町二
ノ二一五（東京鐵道局電力部文書課）
岩武　眞一（10）中華民國々立北平大學
文學院內（同校在學）
岩本　壽峯（16後）（小倉市紺屋町、小倉
區裁判所）
宇喜多景家（八）神戸市神戸區中山手通
四丁目官舍
小川　又次（16後）大阪市此花區櫻島町
四四、稅關官舍城六寮內
大柏清三郎（明38）高松市西通町七七（大
政翼贊會香川支部顧問）
大塚　勇（9）南區東櫓町七
岡田　瀧次（14）神戸市林田區西尻池町
三ノ五〇
岡田　正治（12）香港占領地、總督部
沖島與之助（四）京城府西大門町二ノ一
（京城稅務監督局會計課長）
片岡　公明（15）天王寺區伶人町一〇三
瓦本　眞市（4）吹田市垂水六八（東洋
バイト製作所）
小阪田　力（五）中河內郡松原町上田一
九五
佐野雄一郎（16前）神戸市神戸區江戸町
一〇五
坂口正一郎（16前）東淀川區豐崎東通四
丁目鐵道官舍三號ノ一
澤邊金三郎（三）北區老松町三ノ一一
島岡　幾造（九）（陸軍司政官）
末廣　清吉（明40）京城府青葉町一ノ九七ノ八
末平　達郎（8）岡山市信濃町一一九
（中國合同新聞社）
杉田友治郎（12）奈良縣南葛城郡御所町
（北支自動車工業會社）
砂子　若松（二）神戸市神戸區元町通七
ノ二五
勢渡　逞男（二）（札幌警察署）
田中伸五郎（三）咸興府錦町一ノ七五
高尾晋太郎（二）北區北同心町二ノ五二
樽　庄一（9）（華北交通濟南鐵路局警
務處保安科）
丹原　長七（二）岸和田市南町一六六〇
都成　敎義（15）横濱市神奈川區反町一
中山　成彦（11）朝鮮咸北吉州郡吉州邑
營基洞六九（富士精鑛會社）
長野　壽雄（10）中華民國青島市滄口大
馬路三號、農光手巾染織工廠內
野口　正雄（10）大阪鐵工所調度課
納庄清之進（4）北海道雜內町曲淵、稚
內炭鑛社宅內（天北石炭鑛業會社）
原　仙吉（二）西區江ノ子島東之町
久田　一榮（四）西宮市常磐町九
平田喜一郎（明43）（伊太利領事館、同工
部局顧問）
富家逸太郎（九）中河內郡眉津村鴻池九
九八（八志滿商會）
藤森勝太郎（8）平壤府紋繡町一七六
（平壤地方法院）
分藤　重輝（2）堺市三條通五ノ三九
（大阪若山鐵工所）
前田　幸男（16前）大連市山縣通四八ノ
一ノ六、中島方（滿洲海運會社大連支店）

增成　勝治（五）東京市中野區野方町二ノ一五六七
松浦雅之助（4）上海百老匯路六五號、華興商業銀行
松野　慶一（13）神戸市須磨區西垂水町一一五五（兵庫縣總務部地方課）
松本　正寛（明29）京城府大和町一ノ元
丸物　彰（14）西條市下町六七三（西條區裁判所檢事局）
三上　吉隆（五）京城府司課町九七（殖産銀行庶務課長）
三原新三郎（五）（日出リング製作所）
村上　三政（12）京城府練兵町一〇三
京城地方法院檢事）
森岡　正典（14）京城府若草町六四（西本組）
山川　兵一（6）（大阪府地黄警察署長）
山田　壽男（一〇）京城府大平通二ノ三六
山本　洋平（五）神戸市須磨區村雨町二
吉岡勇四郎（七）米子市錦町一丁目鐵道官舎　大阪鐵道局後藤工機部事務係長）
吉田治良吉（5）德島市助任町一ノ二四
德島地方裁判所判事）
吉田平治郎（明40）京城府花園町六七、藤村方
吉本　悍（12）（朝鮮慶尙南道河東邑、鐵道局河東工事區）
吉本　肇（9）京城府永登浦外高天里社宅（關東機械製作所調度課長）
賴光　密夫（15）兵庫縣明石郡押部谷村
木見三六五
若松四四雄（15）吹田市南泉町三二八七
渡邊　明夫（8）住吉區播磨町西ノ三
牧野政一氏女尙子嬢と華燭の典を擧ゲ

專二經

芦田喜太郎（五）（野村銀行吹田北支店）
飯田　一男（15）東京市蒲田區蓮沼一ノ一〇ノ三（東京日々新聞社）
猪川　俊夫（3）平壤府山手町六（國産自動車會社平壤支店）
今島　實治（3）京城府竹添町一ノ七五（金融組合聯合會參事）
岩井　義雄（12）小倉市三萩野片野九四八（朝日新聞西部本社普及部）
木下　宏（9）豐能郡箕面村半町四〇三ノ四四（發動機製造會社池田工場）
小西　直意（五）京城府黑石町山一〇ノ三
佐藤　恒雄（6）堺市上野芝向ヶ丘町一二五六
鯵峨松太郎（五）釜山府西町三ノ二一（住友生命釜山支店）
仙崎　憲治（11）東京市芝區田村町二ノ四ノ六、化學製品輸出振興會社
田口　喜義（7）西成區田蟹通四ノ七
高木　啓（14）兵庫縣武庫郡本庄村西青木一七四
塚本　康雄（4）東京市大森區堤方町二五〇（東京螺旋管製作所取締役）
土屋金刀逸（2）京城府南大門通二ノ一〇三（安田銀行京城支店）
平井　太郎（7）（東亞羅工業會社富山ラミー工場）

專二商

天野　平一（二）尼崎市七松神樂三一
淺野　茂樹（4）朝鮮大邱府鳳山町二三（大邱郵便局）
秋山　雪夫（4）京城府南米倉町二〇一
有本　正一（10）福知山市東岡町二八二
池浦　恒一（四）大邱府新町一八二（機械商）
岩本　昌旭（12）朝鮮平北江界邑本町三三
植村　岩男（14）（纖維製品輸出振興會社大阪支店）
江畑　三郎（10）港區八雲町三ノ三六
尾原　東成（8）京城府岡崎町二八
大浦　德壽（14）東成區深江東二ノ三四（前田金屬工業會社）
大濱　壽一（16）上海昆山路一一六號、重松藥局内
吉本　夏夫（13）豐中市南刀根山四二四

專文

岩尾　長（10國）（京城日報仁川支局）
黑岩　義男（16前英）北支河北省冀東道灤縣（中華民國新民會總會）
柴田　士（13英）福井縣南條郡武生町老松七二帝國酸素會社武生工場）
多氣田　治（16後國）仙臺市北四番丁一二二、薄田清方（東北帝大法文學部在學中）
中井　安雄（7國）（大和金屬工業會社滿水鐵工所）
久田日出男（7英）港區六條通一ノ二
平井　宜宏（7國）上海北四川路新群里七號、中支那煙草組合内
村田　一男（12英）上海楊樹路浦路二〇八六號、同興紗廠

法

大西三津治　朝鮮鎭南浦府龍井町二〇
小林　壽夫　福山市三之丸町甲四三ノ四

改姓名

昭9專一商　河西　文夫　大寺　文夫
昭12專一法　金彦洙　金宮清博
昭9專一法　金成采　金宮光輝
昭11專一法　金昌吉　金城昌吉
昭12專一商　金昌健　善谷昌健
昭14大法　栗本五十吉　勝間五十吉
臨16專一法　阪本泰玉　阪本吉廣
昭10大經　辛璟奎　辛島奎三
昭10大法　高昌奭　高島秀光
昭2專經　土屋省一　齋藤友八
昭10大法　向井啓治　向井裕亮
昭15大商　安井旭　梅田旭

訃報

長谷川安治（大13專法 大14專法）本會姫路支部長として本會の爲盡力される處多大であつたが、去る十月二十七日逝去せられた。遺族姫路市八代町四九八ノ一　男　長谷川善也殿
高山　龍治（昭15專二法）去る五月下旬某方面に軍屬として渡航中遭難された
松山　幸嗣（昭11大法）去る六月二十五日於滿洲逝去、遺族宮崎縣南那珂郡北鄕村三原、後松山文子夫人
盛　又三郎（昭11大法）去る十月十日逝去、十一日自午後二時至同三時葬儀が執行された。遺族、堺市寺地町東三ノ一八、母盛タツ殿

校友會費拂込者氏名

◇一時拂（金五拾圓）

砂田憲男　野村正德　濱瀨英明　松廣壽衛

◇昭和十七年度會費（金參圓）

阿部敬二郎　東正澄　荒木達雄　淺野巖
赤尾正義　有井與市　有重榮　東三郎
安部文一　有田勝義　天野正巳　上霜達雄
伊藤武夫　井上政一　岩本諭一　泉森嘉一郎
岩井清和　井上伊和時　岩本活一　入江功二
乾文雄　伊藤信治　一階弘吉　池田信一
井上義次　伊藤篤　岩倉一雄　入田順雄
羅垣一男　井料嘉三郎　井上清　梅村勉
上原三郎　上田義信　内田行　遠藤精三
江崎壽保　江藤知壽　大西實　小澤幸夫
奥田籌夫　小田和夫　大松良行　大島隆三
小野修一　奥田茂夫　大西直逸　奥村博三
上川新太郎　河内啓三　川村太郎　加藤禎一
梶靜雄　瓦谷好次郎　加茂三郎　柏原壽夫
垣内恒夫　加藤道宣　金谷保男　片岡一男
加茂儀市　角本通也　衣川誠喜　北川檜雄
北薗近　北村蕉　清川博正　北田法璋
喜多宗一郎　窪田仁德　桑原守也　黒田健太郎
黒飛博　黒川篤　倉貫重治　小谷義一
小寺辰雄　小林勝美　小林蕭　阪口正三
酒井行直　新堀鑛麿治　伊藤眞守　財滿利昭
島谷直治　下西清朝　清水迪　信藤正憲
嶋崎金次　島田作二郎　嶋三雄　清水實
須磨研一　鈴木淳三郎　杉本敬彰　鈴木勳
須田喜三男　關昌純　武田建一　高見忠能
高橋政則　田中正巳　多田一夫　田仲嘉久
谷口嘉郎　田中忠雄　高田康雄　高橋勝次郎
靄田武　鶴田榮　塚本收　寺口義幸
寺見利一　堂上勇治　道家誠之　東條建三
鳥飼整治　中川藤一　中橋與松　中島輝弘
中島靖夫　永松均　永野壹榮　中島浩
成瀨繁夫　中谷壽夫　中島正克　中村重雄
中澤俊雄　西光健次　西村末治　西川澄
西中丈夫　野口信武　能勢鉞信　農野寛融
沼田正路　萩原公　東野溝　二見豐一
藤原義行　松本義貞　松尾鍾　南靜
本山幸男　山田直記　山澤泰　安田良一
余島弘　分島信　阿部博　阿田子久司
阿部信明　秋田政雄　淺田達郎　石黒
石田尙三　石田茂　池上貞治　入野昌志
池田謙三　岩田泰次　生駒茂次　植村文雄
上田吉數　梅本章　梅澤誠治　稻葉正雄
飯田尙生　井上賓則　井口二郎　伊東善一
入佐憲正　上田文男　植田滋　植竹健
宇都宮隆一　上田秀一　内海捨次　内海志賀夫
上田讓　江草三四治　遠藤峰雄　海老原良夫
大崎富士雄　大津九一郎　大西彰　新
大橋清一　大久保清一　尾上幸生　小倉勳
沖廣正人　岡邦平　荻野誠造　大内信次郎
尾本平太郎　尾下勇一郎　大槻久男　大野賢藏
小野勝　大村安夫　奥野博　岡田信一
越後正一　大成二郎　梅本勝一　加納芳雄
加藤明納　柏木勝三　金春信高　川竹嘉保
紙谷義雄　神谷肇　神野宜信　河西善三郎
片山勝　河合平二　河村雅吉　黒田博
川根豐　加藤統理　川口成光　金田茂夫
片山勉　片岡秀夫　神末榮夫　加藤敏威
河村久太郎　加藤章道　片岡康幸　勝部英明
神垣忠幸　神谷榮夫　北氏長治郎　木村俊男
木村正　木村宗一　清原利男　熊田豐
黒澤五郎　熊田盛三　倉田陽吉　國木敏雄
小林好　小山眞一　小西文雄　小濱晃三
小城四郎　小濱良典　幸田重雄　古谷松太郎
兒島本次　後藤幸雄　駒井昌雄　佐藤勉
榮修　笹井紀男　佐藤志郎　佐々木章夫
阪上博和　佐々木信夫　澤田稔　相根勝
酒井宗一　櫻井俊次　塩川滋　塩本一郎
島田武夫　下岡英次郎　白野信三　清水政治郎
庄司逸人　執行喜次郎　下山健三　杉本信一
杉山保手　鈴木清繁　鈴木良男　鈴木學
住田元彦　菅守節　瀧昌雄　谷山武
谷田幸男　高嶋廣安　高木鷹夫　田村義久
竹中武　谷口重敏　竹内定雄　立山實
谷本忠雄　高西輝雄　田中權四郎　田川公一
高田一郎　田中茂　田中英夫　田中英三
田中隆一　田邊茂治　高木重敏　高田明夫
高井妥　丹治修　竹田正章　田中千葉世鳳
土山昇　土口和忠　寺田久男　寺田實
豐田稔　富澤忠義　戸田修一　北村喜多正利
北川勘三郎　北田公夫　京村行生　木谷重夫
熊田卯三男　國末亨　久保田貞次郎　小林武男
小西昌市　小峰賢一　近藤茂　猛池博和
兒玉登　小宮逸夫　小泉博　楠敏勝
小林信行　櫻井茂　笹川嘉一　雜古巖
齋藤徹宗　佐野義春　澤田之宏　坂井嘉壽雄
眞光利一　佐藤正太郎　重本肅　芝池益太
繁田甲象　白野信三　清水政治郎　鈴木醇一
鈴木正夫　鈴木信夫　鈴木稔　角木稔
鈴木重敏　十河保治　多田稔　田邊武
谷口建二　竹崎芳造　瀧見毅　田邊益之
高橋桃雄　竹村英男　谷口毅　辰野宇太次
辰巳博聰　田中一郎　田中茂　瀧典通
田中正治　大幸修三　高木重敏　谷口喜代治
立石純一　谷川繁　高見芳信　田尻久雄
辻正男　手島忠博　土井博　寅島哲夫
富田恭二郎　友延勇　中西甚太郎

（以下次號）

關西大學教授
經濟學博士　正井敬次著

國民經濟原論 ―

國民經濟組織論

定價二・〇〇
送料　・二〇

新刊

序　本書國民經濟組織論は著者の意圖に於ける「國民經濟原論」の第一篇「總論」に當る部分を右の如くに名付けて之を單行の一論著とせるもの。國民經濟原論の名の下に、經濟學の一般的基礎的理論を研究せんとする場合、如何なる體系と內容とに於て之を試みるべきやは甚だ困難である。とは謂へ、著者の意圖に於ける、之を單なる市場經濟理論として取扱ふことに滿足せずして、專ら國民經濟原論と云ふ意味に於ける理論として取扱つた點、新らしい經濟理論への一示唆を與ふるものである。

神戸商業大學教授　丸谷喜市著

價値及價格研究班

價　三・〇〇
〒　・二〇

三版出來

著者の言葉――經濟人と經濟學者の心はいま專ら政策乃至實踐の問題に向けられてゐる。時代の潮が極めて急速且つ雄大に動くとき、之は當然のことである。それに付けても基礎的、理論的研究は一日も忽にすべきでない。

東京帝大元教授　矢內原忠雄著

帝國主義下の印度

價　二・五〇
〒　二〇

五版

植民地の社會的發展の一切は統治國の植民政策に依りて、一定の方向に或は促進せられ或は限定せられる。而して印度は世界最大の植民國として大きな話題を提供する

黃警頑著
左山貞雄譯　大川周明序

華僑問題と世界

價　一・八〇
〒　・一五

南方經綸に當り英國支配階級と原住民との間に根强い中間的經濟的勢力を有してゐる華僑の問題は今また之を世界的規模に於ても把握すべきであらう

大阪市北區梅田新道　大同書院　大阪二七九一番振替